

## 農業支援員として研修し、 新規就農を目指す



佐藤 力丸 (さとう りきまる)

2001年生まれ、奈良県香芝市出身。関西の一般の大学を卒業後、名寄市に農業支援員として地域おこし協力隊に着任。高校時代までサッカーで培った運動能力を武器に農家を目指す。

### 【北海道での農業へのあこがれ】

私が名寄市の地域おこし協力隊として活動を考えた理由は、まず1つ目に農業支援員の募集があったからです。もともと農業とは全く縁のなかった人生でしたが、大学卒業が近くなった時に、就職や大学院の進学などの選択を迫られた中で模索した結果、やはり自分の性格に合って、そのまま強みを活かせるような仕事でないと長くは続けられないなと思い農業を選択しました。性格的に身体を動かしていないと気が済まず、自分のペースでゴリゴリ進められる仕事でないと自分の良さを出せないと感じていました。その点農業は、天候や人間関係に左右されるものの、自分でスケジュールを組み、融通が利くので自分の良さを最大限活かせると考えました。

また、大学時代に北海道を車で約1ヶ月かけて周った経験が大きく影響しています。その時に、地元の関西では比べられないほど広大な土地で生活している北海道の方々を見て、一種のあこがれを抱きました。とんでもないスケール感の中、巨大なトラクターを運転

し、農作物を育てている農家さんがとてもかっこよく見えました。日々天候や環境、物価などに左右される中で柔軟に対応しながら力強く生きる姿を見て、自分も農家さんのようにたくましい人間になりたいと感じました。まずは農業を勉強しながら働く環境が必要であると考え応募しました。

### 【名寄の自然とともに農業を学ぶ】

まず、農業を学べる環境が整っていたこと、また農業を学びながらさまざま手厚い支援を受けられることが大きいです。家賃補助、車両借り上げ、通信費、免許取得代金、外部への研修費などがありますが、その中でも報償費（給料）が特に良いので、新規就農を考える上で少しでも手持ちをもっておく必要性を考えると、非常に有り難い支援だといえます。

また、農業をする上でどのような農作物の栽培に携われるかということは、自分のモチベーションを保つ上で重要な要素の1つになるとを考えます。私自身、北海道に来たのなら北海道らしい作物の栽培に携わりたいと考えていたので、スイートコーン、かぼちゃなど北海道を代表する作物を名産品に持つ名寄市に魅力を感じました。ただし、その名産品の栽培に携われるからといって、その作物の栽培で長く営農し続けられるかというのは、当時全く農業素人の私にとって測れない指標でもありました。代表的な作物に携わりつつ、いろいろな選択肢を考えられる環境を求めていたのですが、それに当てはまる地域がこの名寄市でした。

ほかに、何より長く営農し続けるためには自分の健康を第一に考えなくてはなりません。今は亡き祖父に、常日頃から何をするときも健康のことだけは気を付け



名寄サンピラーパークのひまわり畠

るよう言われてきました。直感ではありますが、大学時代に北海道を周る中で一番空気感というか肌感が合うなと感じたのが旭川から名寄くらいの場所であり、自然は豊かでありながら、最低限の人の多さや賑わいがあり、なんとなく住みやすそうだと感じました。できる限りストレスのない環境で生活すること、また都市部から少し距離があることで農業に集中できる環境であるということも選ぶ決め手になりました。

名寄市の魅力はやはり自然環境だと感じます。春夏秋冬どの時期をとっても綺麗な景色が見られますし、私自身は釣りが好きなので日本を代表する大河、天塩川が近くにあるのもお気に入りです。

## 【これまでの活動】

主に農業に関わる活動ですが、具体的にはもち米やスイートコーンなどで就農を考えているので、播種、育苗、定植、管理作業、収穫まで何件もの農家さんを回りながら研修させていただき、それぞれいろいろなやり方を見て学び3年たったころには就農できるよう日々研鑽しています。また、2年目になる今年は、風蓮町にある振興センターという農業施設の1区画をお借りして、スイートコーンを播種から収穫まで自分で計画を立て栽培しました。結果、思ったように収量を上げられず、農業の難しさを実感している次第であります。

そのほか地域の祭りの手伝いや準備を行うことにも積極的に参加させていただきました。その中で名寄市という場所が、人口の少ないエリアであっても、皆で手を取り合って地域を活性化させようという試みの強い場所なのだと認識しました。地元の奈良や都市部で



地域おこし協力隊2年目、自分で栽培したトウキビ畑

暮らしていた時には感じたことのないような、自分たちの街を自分たちで動かしている感は、今現在人生で初めて経験していることです。夏の産業まつりや冬の新春餅つき大会などの活動が大きく印象に残っており、名寄市の名産であるもち米を使ったイベントの運営に大きく関わりました。



なよろ産業まつりにて、地域おこし協力隊の集まり

## 【就農を目指して・・・農家は毎年が1年生】

私はこれまで約1年半名寄市に移り住んできて、まだ慣れない中で多くの人に助けてもらいながら、ある意味、提供される側のゲストのような感覚で日々生活していました。今後はいろいろな農家さんから学んだことを活かし、研修の中でもより主体的に手助けする、自分が就農することで名寄市の農業の担い手として貢献できるようになる、また、名寄市に根差して生きるならば、今より積極的に関わっていくことが大切であり、興味を向ける必要があると考えます。

農業も地域との関わりもうまくいっている時にはもちろんやりがいは感じるのですが、なかなか思うように結果が出なかったり、人間関係をうまく築けなかったりすることも多々あるので、それをどう改善していくのか自分なりに考えて動くことにも今はやりがいを感じています。

ここ名寄市に来てから、「農家は毎年が1年生」という言葉を非常によく耳にします。この言葉のように、農業はもちろん日常生活でも、毎日1年生のような気持ちで変化に適応できるよう、初心を忘れず、いつも新しい自分でいられるよう邁進したいです。